

# 留学生の多様化に対応した新しい日本語教育プログラムの役割

## —教育のグローバル化の流れの中で—

### The Role of the New Japanese Language Program in Response to the Diversification of International Students: The Expansion of the Globalization of Education

村田 晶子（法政大学グローバル教育センター教授）  
竹山 直子（法政大学グローバル教育センター教育講師）  
長谷川 由香（法政大学グローバル教育センター教育講師）  
池田 幸弘（法政大学グローバル教育センター専任講師）

---

#### キーワード

日本語教育 留学生支援 外国人労働者 英語化

#### 要旨

大学の国際化が加速化する中で、大学における外国人留学生数が拡大し、多様化する留学生の支援としての日本語教育の重要性が高まっている。本稿ではまず留学生政策、高等教育のグローバル化戦略の中で日本語教育に期待される役割がどのように変化してきたのかを検討し、留学生の多様化の流れの中で新しい日本語教育を位置づける。そして、本学で2017年度から開始された日本語教育プログラム（JLP）の役割と意義を分析する。

---

## 1. 大学のグローバル化の中で求められる日本語教育

高等教育のグローバル化が強く求められる中、多くの大学において留学生数が増加し、多様な留学生への支援として、日本語教育の重要性が高まっている。従来の大学の日本語教育は、学部の留学生を対象とし、来日してから日本語学校で1～2年学び、ある程度日本での生活に慣れ、一定レベル以上の日本語力を身につけた後に大学に入学する学生を対象としてきた。しかし、高等教育のグローバル化と連動した大学の留学生の受け入れルートの拡大と多様化の流れの中、英語学位プログラム、交換留学生プログラム、短期私費留学生プログラムなどさまざま

なプログラムで来日する学生が増えた結果、留学生の日本語レベル、学習ニーズも多様化しており、日本語学習歴のない学生から上級の学生まで多様なレベルの学生に対応した柔軟な日本語教育を行っていくことが大学の日本語教育に求められている。

さらに近年の留学生政策（留学生30万人計画、アジア人財構想）では、留学生の受け入れ拡大が国の労働者確保とリンクして位置づけられており、大学における留学生教育は、従来のようなアカデミック日本語力の養成だけでなく、留学生のキャリア支援を視野に入れたビジネス日本語教育なども注目されるようになってきている。

大学における日本語教育の役割と意義を考え

る際、こうした留学生政策、高等教育のグローバル化の流れの中に日本語教育を位置づけてマクロの視点からその役割を俯瞰するとともに、日本語をいかに教えるかというプログラム実践のミクロの議論をしていくことが必要であろう。これまでの日本語教育の研究の多くが、日本語能力の向上を研究テーマとして取り上げてきたが、マクロの視点とミクロの視点を連動させた分析は非常に少ない。教育のグローバル化における日本語教育の新しい方向性と意義を考えていく上で、こうした視点からの研究が求められている。

本稿ではこのような点を踏まえて、以下の3点を検討したい。

- 1) 広義の日本語教育の役割について検討するために1980年代からの留学生受け入れ環境の変化を分析し、大学における留学生の受け入れ拡大と多様化がどのように政策的に推し進められてきたのかを検討する。さらに、本学における留学生受け入れを、政策的な外国人留学生受け入れの流れである「大学のグローバル化」、「労働力確保」、「英語化」などの文脈の中に位置づける。
- 2) 日本語教育プログラム（JLPプログラム）が、大学のグローバル化がもたらす学生の多様性に対応した教育としてどのように行われているのか具体的に分析をする。JLPプログラムは留学生の日本語の習熟度に応じて初級から上級までの7レベルで教育を行っているため、各レベルで教育分析を行い、課題を明らかにする。
- 3) 本稿で検討した事項を踏まえて、グローバル化時代の大学の日本語教育の多様な役割と今後の展望を明らかにする。

本稿は村田が1～4章、6章を執筆し、5章（JLPプログラムの各レベルの教育概要）は長谷川（初級）、竹山（中級）、池田（中上級）、村田（上級）が分担執筆した。

## 2. 留学生受け入れ政策の変化

高等教育のグローバル化が進められる中、大

学キャンパスで多くの留学生が学んでおり、多様な言語文化的な背景をもった学生間の交流の機会も増えている。しかし、40年前の大学キャンパスにおいて、留学生は珍しい存在であり、1980年代には日本全体で1万人程度にすぎなかった（平成20年度文部科学白書）。そうした状況は留学生政策による留学生数の目標設定、そして受け入れの目的の転換の中で、どのような変化をたどってきたのだろうか。

留学生数の増加の契機として、1980年代に中曽根内閣によって打ち出された「留学生10万人計画」の提言が挙げられる。10万人計画では、経済先進国となった日本の留学生受け入れが他の先進国と比較して非常に少ないことを踏まえて、開発途上国の人材育成支援としての留学生の受け入れを目指し、21世紀初頭に10万人の留学生（国費留学生1：私費留学生9の割合）を受け入れることを目標とした。この計画により政府が留学生受け入れに力を入れるようになって以降、留学生数は徐々に増加していったが、この段階では、留学生の招致は、途上国の人材育成への国際協力という意味合いが強かった。

これに対して、「留学生10万人計画」達成後の2008年に打ち出された「留学生30万人計画」では、国家のグローバル戦略の一環として、30万人の留学生を受け入れるという目標が設定され、日本への留学生の招致活動、大学における受け入れ体制の強化が提言されると同時に、留学生を労働力確保の文脈の中に明確に位置づけている。ここでは留学生が卒業後に帰国して母国に貢献することが前提とされるのではなく、卒業後には日本に定着して、働くことが念頭に置かれるようになっている。その視点の転換は、30万人計画の骨子の冒頭にある「我が国にとっての留学生交流の意義」のセクションで明確に述べられており、留学生の必要性を「我が国の科学技術、産業等の国際競争力の維持・向上」、「我が国の経済活動の担い手として、労働市場に（優秀な）人材を確保」といった経済的ニーズとリンクさせている。

こうした留学生政策の変化には、経済社会のグローバル化が加速化する中で世界規模での留学生獲得競争が激化し (Brown & Tannock 2009)、日本の経済発展のために優秀な人材を国境を越えて獲得しなければならないという政府や経済界の危機感があることは言うまでもない (グローバル人材育成推進会議 2012)。こうした傾向は、30万人計画の1年前に発表された「アジア人財資金構想事業」(2007-2013)に顕著に見て取ることができ、この事業では6年間で100億円を超える予算が投入され、大学、企業、地域が共同で留学生の就職支援を行い、これにより大学における「ビジネス日本語教育」が新しく確立された (神吉2017)。

さらに、政府は2018年の経済財政運営の指針「骨太方針」において、外国人労働者の受け入れ拡大を打ち出しており、今後ますます外国人の就労を意識した日本語教育の重要性が高まることが予想される。こうした中で、大学の日本語教育には、留学生の生活・勉学に必要な日本語教育だけでなく、卒業・修了後のキャリアまで視野に入れた広義のトランジション教育 (OECD 2010、溝上・松下2014) の中にその役割を位置づけていくことが求められるようになっていく。

### 3. 留学生の「多様化」と「英語化」

留学生政策 (留学生30万人計画) におけるもう一つの注目点は、日本が留学生に「選ばれる」ための「多様な」受け入れプログラムの推進であり、日本語を学ぶ、という障壁を撤廃した「英語のみによるコース」拡大の推進が挙げられる。「英語のみによるコース」とは、①英語で専門科目を履修することにより学位を取得することができる英語学位コース、②海外の協定大学から来る交換留学生を対象としたコースを指す。

従来の大学の留学生の受け入れでは、ある程度の日本語の学習歴が求められてきたのに対し、「英語のみによるコース」は、日本語学習

歴がほとんどない学生でも応募することができ、日本語レベルを問わず、日本留学の間口を広げ、より多くの、より多様な留学生の受入を行うための役割を果たしている。また、英語のみのコースは留学生だけでなく、日本人学生の留学準備クラスとしても活用されており、留学生、日本人学生の双方に開かれた国際教育の機会となっている。

このような大学のグローバル化に伴う英語による学習環境の拡充は、日本語教育を不要にするように見えるが、実際は大学での英語による学習環境から一歩外の世界に出たとき、生活、交流、アルバイト、就労などさまざまな場面で日本語でのコミュニケーションが求められる。「英語のみで行われる」はずの授業においても、日本人学生の多いクラスでは学生間のディスカッション、質疑応答が日本語で行われたり、研究室メンバーとの交流が日本語でなされたりするなど、現実的にはすべてを英語で行うことが難しく、留学生が自分の環境に応じて、ある程度の日本語力をもっていることが望ましいことが指摘されている (村田2011)。

とりわけ言語力に関して問題になるのが、日本での就職活動であり、日本企業が留学生に求める日本語能力は依然としてN1以上であることが多い。経済産業省委託事業「平成26年度外国人留学生の就職及び定着状況に関する調査」(2015)によれば、9割近い企業が英語力の高い留学生に対してもN1以上の日本語力を求めていることから、英語学位コースの学生が大学での勉学、就職の機会を限定されないために、大学入学後に、希望者に対して日本語学習の機会を提供していくことが重要となっている。

また、「英語のみの専門科目」を履修する学生には、英語学位コースの学生だけでなく、短期間 (1、2学期間)、日本の大学で学ぶ交換留学生も含まれるが、多くの大学で、短期の留学生の受け入れにも力が入れられており、留学生受け入れ拡大目標の大きな要となっている。こうした短期留学生の多くは、日本のアニ

メ、マンガ、ドラマ、Jポップなどポップカルチャーへの興味をきっかけとして日本に留学し、英語による科目だけでなく、日本語科目へのニーズが高い（本学の交換留学生の場合もその約9割が日本語科目を履修している）。短期留学生の日本語学習のニーズは、英語学位コースの学生のように4年間日本で学ぶ留学生とは異なる側面を持っており、1、2学期間の留学期間に日本社会や文化を知り、学内外で多様な人々と交流するために日本語を学びたいと考える学生は多い。それと同時に大学3、4年生の参加者が多いことから、将来の就職に役立つ日本語、大学院進学のための日本語など、多様なニーズに対応した教育を提供することもまた日本語教育プログラムに求められている。

さらに、18歳人口の減少に伴い、多くの大学が経営上の観点から学部への留学生の受け入れを増やす方向にあり、受け入れ方法にも変化が表れている。大学によっては従来の方針を転換し、上級の日本語学習者だけでなく、より幅広い日本語レベルの学生を受け入れ始めている。しかし、そうした大学では学部で学ぶ留学生の日本語レベルにも多様性が広がると同時に、ごく初歩的な日本語の指導に苦慮しているという声も聞かれ、多様性にどのように対応していくのか大学側の変化が求められている。

以上のような「英語のみによるコース」の拡大に加え、留学生のリクルーティングの一環として、超短期プログラム（1か月以内の語学留学）の提供、日本語学校との連携、私費の短期留学生を対象とした日本語コースの設置など、さまざまな手法を取る大学が増えており、留学生の受け入れは多様化している。

#### 4. 大学の日本語教育の新しい潮流

以上にみたような近年の留学生増加政策の変化、留学生の多様化の流れの中で、大学で行われている日本語教育は従来の学部留学生に対して行ってきたような教育（上級学習者への補強教育）とは異なる対応をしていくことが求め

られている。ここで注意しなければならないのは、留学生の「多様性」に対する考え方であろう。政府による高等教育のグローバル化政策は、その背景に国益としての優秀な外国人労働者確保という動機が働いていることは間違いない。しかし、「グローバル競争に有利だとされる状態が、多様性の許容を前提としなければ成り立たなくなっている」（恒吉2016：24）という点は大学教育における留学生受け入れを考える際に非常に重要である。従来の学部の留学生教育において、留学生は学部生と同じようにレポートを書き、大学に「適応」し、「同化」することが自明視される傾向にあった。しかし、留学生の多様化が進む中で、「レベルの高い日本語力を習得していること」は決して自明のことではなくなっており、また学部留学生の「高い」とされる日本語能力は彼らが職業世界に出ていくために十分なものであるかどうかという分析も十分にはなされておらず、支援の体制も行き届いていないのが現状ではないだろうか。大学は留学生の多様化を受け止め、責任ある受け入れの環境を確立すること、そして積極的に多様性から学ぶ姿勢が求められており、日本語教育が留学生の「同化教育」ではなく、多様性を伸ばし、学生間が共に学び合う多文化学習の場としての役割を果たすことが重要になってきている（村田2018）。

また、大学教育全体が、従来の講義形式の教育から学習者中心への転換を進めている中で、留学生、日本人学生を問わず、学生が自律的に学び、主体的に人生を切り開き、社会に参加することを支えていく教育が求められている。日本語教育においても、言語を知識体系（文法、語彙、表記など）として教え込むことが重視された時代から、1980年代以降の言語運用力を重視するコミュニケーションアプローチへとパラダイムシフトが起き、現在では学習者中心の言語運用力を重視した教育が定着している。さらに、近年では日本で生活する外国人や外国にルーツを持った人々が増加する中で、「生活者」のた

めの日本語教育の重要性が増しており、留学生だけでなく外国人、外国にルーツを持った人々が主体的に生き、社会とかわるための言語コミュニケーション教育（社会参加のための日本語教育）、言語的なマイノリティーである外国人、あるいは外国にルーツを持った人々の言語学習権を守り、学びの場を提供するという意味でも日本語教育の役割が重要になっている。

こうした中で、大学における日本語教育は、多様な留学生の日本語レベルやニーズに対応し、柔軟な日本語教育支援を行うと同時に、留学生が生活、勉学、研究、キャリア構築などのさまざまな場面で自律的に学び、言葉を通じて社会と主体的にかかわっていくための学習支援の機会を提供して行くことが非常に重要になっている。

## 5. JLPプログラム

本学において2017年度より開始された日本語教育プログラム（JLP）は、こうした多様な留学生を対象とした言語文化教育を行っている。JLPはもともとは短期の交換留学生プログラム（ESOP）の一部として留学生に提供していた日本語科目群約30科目をベースとしており、

2013年度に開始された文部科学省のグローバル人材育成事業、スーパーグローバル大学創生事業に採択された大学のグローバル化事業の一環として、日本語教育の充実化が図られたことをきっかけとして、科目数を約60科目に増やし、2017年度から日本語教育プログラムとして発足することになった。

JLPでは、交換留学生、私費留学生、英語学位生など多様な日本語学習歴と学習ニーズを持った留学生に対する日本語教育を行っており、日本語の知識がほとんどない留学生のための生活日本語から高度なアカデミック日本語、ビジネス日本語に至るまで多様な学生のニーズに対応し科目を提供している。従来の学部の日本語教育と比べたJLPプログラムの特徴は以下のとおりである。

- ①多様なレベル（初級から上級の7レベル）
- ②科目数の充実（54科目：2018年度現在）
- ③ニーズに応じた科目の提供（ビジネス日本語、アカデミック日本語、ブリッジング科目（日本語学習だけではなく、日本社会文化のコンテンツ学習も重視した科目群）など）

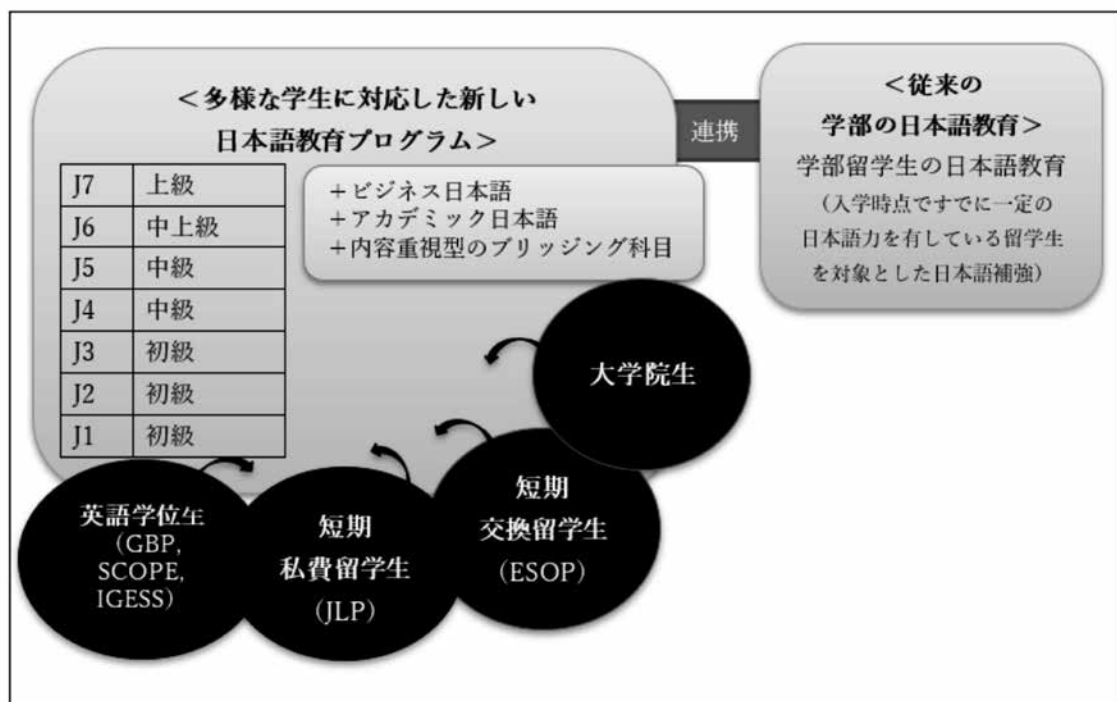


図1. JLPプログラムの科目構成

以下では、日本語教育プログラム（JLP）における初級、中級、上級のレベル別日本語教育について、各レベルの概要と科目構成、教育実践の分析を紹介する（各レベルの目安は巻末資料を参照）。なお、2017年春学期にJLP科目を履修した学生122名に対し、Google Formによる期末アンケートを行い、103名から有効な回答が得られた。以下の各レベルの「日本語学習の理由」については、本アンケート結果に基づいている。

## 5-1. 初級の教育

### (1) 初級の学習目標と対象者

初級レベルの目標は、日常的な生活場面において日本語でコミュニケーションができるようになることである。基本的な文法・句型を理解し、四技能において運用できるようになることを目指している。初級にはJ1、J2、J3の3レベルが置かれている。

J1レベルは初めて日本語を学ぶ学生を対象とし、日常生活のごく限られた場面において簡単なコミュニケーションができるようになることを目標とし、ひらがな、カタカナの導入のほか、漢字も50字程度読み書きできるようにする。J1の修了時の目標レベルは、CEFRのA1、

ACTFL-OPIの初級-中～初級-上である。

J2レベルは初級中盤のクラスであり、50時間程度の学習歴がある学生を対象としている。日常生活の限られた場面でコミュニケーションがとれること、そして基礎的な語彙や漢字を使って短い文章を読み書きできるようになることを目標としている。J2の修了時の目標レベルは、JLPTのN5、CEFRのA2、ACTFL-OPIの初級-上～中級-下である。漢字は100字程度、語彙は800語程度の習得を目指す。

J3レベルは初級後半のクラスであり、初級レベルの修了を目指し、150時間程度の学習歴がある学生を対象としている。日常生活において必要な表現を理解し、自分なりに意見を述べ、説明ができるようになることを目標としている。漢字は300字、語彙は1500程度を習得し、短い文章を読んだり、簡単な説明文・感想文が書けるようになることを目指す。修了時の目標レベルは、JLPTのN4、CEFRのA2+、ACTFL-OPIの中級-下である。（レベル設定の詳細は資料を参照。）

### (2) 初級の科目構成

J1、J2、J3レベルの科目構成は下記の通りである（表1）。

表1. 初級の科目構成

レベル	科目名（コマ数）		
J1	J1総合 I・II・III（3コマ）		
J2	J2総合 I・II・III（3コマ）		
J3	J3総合 I・II・III（3コマ）	J3聴解・語彙・漢字 （1コマ）	J3会話 （1コマ）

各レベルとも、「総合」クラスが週に3コマあり、単位取得のためには週3回の授業に出席する必要がある。J3には「総合」クラスに加えて「J3聴解・語彙・漢字」と「J3会話」クラスがある。「J3聴解・語彙・漢字」クラスで

は、聴解練習、語彙・漢字の練習およびクイズが行われ、進度の速い総合クラスと併せて履修することで確実な定着を図る目的がある。「J3会話」クラスではJ3総合の学習項目に関連した会話練習を行うことで、より口頭運用能力を

高めるようデザインされている。

(3) 初級レベルの学生のニーズに対応した教育実践の分析

初級の学生が日本語を学ぶ最も大きな理由としては、日本社会や文化に対する関心、日常的コミュニケーションへの必要性の2点が挙げられている(図2)。初級クラスを受講する留学生は、短期の交換留学生と英語学位生であり(図3)、どちらのプログラムの学生もせつかく

日本へ留学したのだからせめて日常会話はできるようにになりたい、というニーズが高い。こうしたニーズを踏まえて、J1～J3クラスでは、まず日常的なコミュニケーションがとれるようになることを第一の目標として、4技能の向上を目指している。授業では新しい語彙や文法を導入し、十分な口頭練習を行ったのち、ペアワーク・グループワークなどで聞いたり話したりする練習を行い、各章の最後で読む練習や書く練習にもつなげていく。

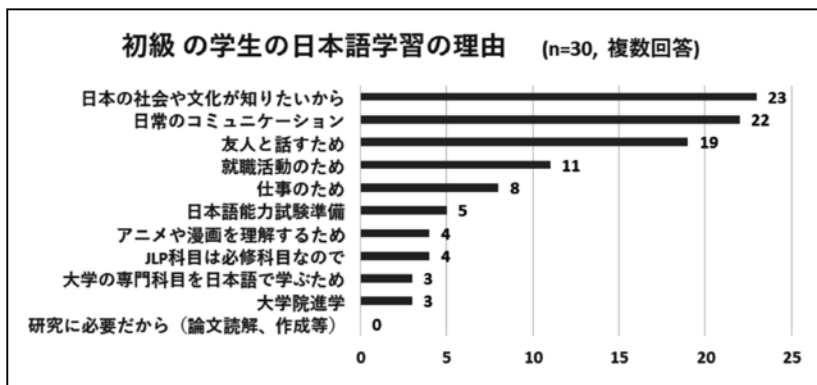


図2. 初級の学生の日本語学習の理由

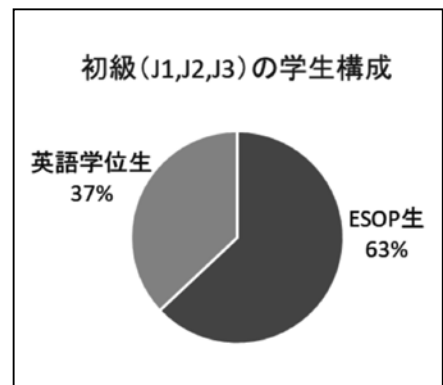


図3. 初級の学生構成

また、初級の全レベルにおいて週2回は日本人学生のボランティアが参加しており、クラス活動の中でのなるべく多くの日本語を話すことに重点を置いており、学生にはボランティアとの日本語を使った交流が好評である。初級のJ1レベルでは全く日本語を学んだことがない学生が日本語を学び始め、授業に積極的に参加し、課題をきちんと提出する学生は1学期間で大きく成長する。学期の最初には、日本語の文字も挨拶表現も全く知らなかった学生が、1学期の終わりには日本語だけで会話が続くようになり、自分の家族や趣味、日本や母国について書いたりスピーチしたりできるようになる。

一方で、初級レベルで学ぶ学生の多くは非漢字圏の学生であり、彼らにとっては、ひらがなやカタカナに加え、漢字や語彙を学ぶことはかなり大きな負担となっている。漢字学習が好きだという学生もいるが、中には毎回の漢字クイズでほとんど得点ができない学生も見られ、週3回の授業で毎回3～5つの漢字と熟語を覚

えていくことが負担となる場合もある。宿題の提出率やクイズの成績、最終成績を総合的に考察すると、成績がふるわない学生、および学習につまずく学生は、総じて漢字の問題を抱えているように思われる。こうした文字学習の困難さは、学生の日本語学習のモチベーションにもつながっていると考えられ、初級前半の途中までは問題なく進んできた学生が、漢字学習が始まってからドロップアウトする例も見られる。日本語を学ぶ以上、漢字学習は避けては通れないものであるが、いかに効率的に、楽しく、負担を感じさせないように漢字を習得していくかは、今後の大きな課題の一つである。クラス活動に加え、Google Classroom等のeラーニングも活用しながら定着をはかっていきたい。同様に、つまずきやすい文法項目についても分析をすすめ、よりきめ細かな指導方法を工夫する必要がある。

学習のモチベーションについては、冒頭でも述べた通り、日本社会文化に対する関心およ

びコミュニケーションの必要性が第一の理由となっている。しかし、その一方で、就職活動や仕事を念頭において日本語を学ぶ学生も一定数見られる。半年あるいは1年のみ日本に滞在するESOP生に対し、英語学位生は4年間を日本で学び、日本での就職を考える学生もいるため、日本語学習に対して長期的な視野を持っていると考えられる。このようにモチベーションや目的が異なる学習者が一つのクラスに混在していることにより、多様性が高まっているが、同時に教育に工夫が必要とされている。初級の総合クラスは週3コマしかないが、4年間日本語を続けていく学生にとっては基礎を固める重要な時期である。その一方で、半年間だけ勉強して少し話せるようになったことに満足して帰国する学生たちもあり、その双方を満足させるクラス運営を工夫していく必要がある。一案として、次学期は属性および目的別のクラス設定を考えている。ESOP生の半年滞在のゼロレベルをJ1クラスに、英語学位生および漢字圏の学生、また多少の学習歴のある学生をJ2クラスに設定し、それぞれ進度や課題の質量、到達目標に変化をつけるという対応策を考えている。また、次学期以降も中級レベルの学習を継続する学生については、中級レベルの担当者との情報共有と連携を密にとる必要がある。

さらに、初級クラスでは複数の教員（2～3名）が一つのレベルを指導するチームティーチングを行っているが、各教員によるアプローチの違いは学習効果にも影響を与えられられる。初級では総合教科書を用いているが、例えば、同じ学習項目であっても、講師によってすべての学習項目をパワーポイントを用いて指導する場合と、そうでない場合があり、今後は教員間の連携、情報共有を図り、教授法の統一を図っていく必要があると考えている。

## 5-2. 中級の教育

### (1) 中級の学習目標と対象者

中級レベルの目標は、一般的な話題に関し

て日本語でコミュニケーションができるようになることである。初級では日常的な生活場面でのコミュニケーションを目指して会話を中心に教育を行うのに対して、中級になると、抽象的、概念的なことを表す学習言語を習得することが目標になり、会話よりも読み書きの学習に重点が置かれるようになる。中級にはJ4、J5のふたつのレベルが設置されている。

J4レベルは中級序盤のクラスで、400時間程度の学習歴がある学生を対象としている。日常的な話題について、複数の文が繋がった、ある程度まとまりのある内容の日本語でコミュニケーションできるようになることを目指している。修了時の目標レベルは、JLPTのN3、CEFRのB1、ACTFL-OPIではIntermediate-Midである。漢字は600字程度、語彙で3000語程度が目標となる。

J5レベルは中級中盤のクラスで、600時間程度の学習歴がある学生が対象である。一般的な話題について、複段落レベルのまとまりのある長さで物事を説明したり意見を述べたりすることを目標としている。会話の際には相手との関係を考慮して適切な表現を選ぶことも求められる。修了時の目標レベルは、JLPTのN2、CEFRのB1+、ACTFL-OPIではIntermediate-High-Advanced Lowであり、漢字は1000字程度、語彙は6000語程度である（レベル設定の詳細は資料2を参照）。

中級レベルで学んでいる学生の内訳を見ると、短期の交換留学で来日したESOP生が7割近くを占め、SCOPE、GBPなど英語で学位を取得する英語学位生が20%弱、残りの約15%が日本語学習を目的に半年から1年間在籍するJLP生（私費科目等履修生）である。このうち、JLP生は日本での進学や就職を視野に入れて集中的に日本語を学習し、上級レベルを目指す学生である。また、ESOP生の半分程度は国で日本語を専攻しており、日本語学習に熱心で高いレベルを目指している。それに対して、専門が日本語でないESOP生、また英語で学



位を取得する英語学位生は、日本で何とか日常生活が送れる程度でよいという学生から、将来の日本での就職を見据えてネイティブレベルになりたいという学生まで、日本語習得へのモチベーションの強弱は学生によってかなり差がある（こうした学生への履修指導の工夫は後述す

る）。

(2) 中級の科目構成

J4、J5 レベルの科目は以下の通り多彩に開講されており、学生は自らのニーズに合わせて科目を選んで履修することができる（表2）。

表2. 中級の科目構成

レベル (コマ数)	科目名
J4 (週10コマ)	復習Ⅰ・Ⅱ (N4文法)、復習Ⅲ (生活漢字)、集中Ⅰ・Ⅱ (N3文法)、読解文法Ⅰ・Ⅱ、聴解・語彙・漢字、会話、作文
J5 (週11コマ)	集中Ⅰ・Ⅴ (読解文法)、集中Ⅱ・Ⅳ (N2文法)、集中Ⅲ (聴解会話)、読解文法Ⅰ・Ⅱ、聴解・語彙・漢字、会話、作文、JLPTN2対策

J4では集中Ⅰ・ⅡとJ4読解文法Ⅰ・Ⅱ、J5では集中Ⅰ・Ⅴ、集中Ⅱ・Ⅳ、J5読解文法Ⅰ・Ⅱ、が文法・読解を扱っているため、このいずれかを軸に、ほかの技能別の授業を組み合わせ受講する学生が多い。しかし例えば、読み書

きの必要はないが毎日の生活で日本人とスムーズにコミュニケーションができるようになりたい、といった学習者であれば、文法や読解の授業は受講せずに会話の授業だけを単独で履修するようなこともできる。

(3) 中級レベルの学生のニーズに対応した教育実践の分析

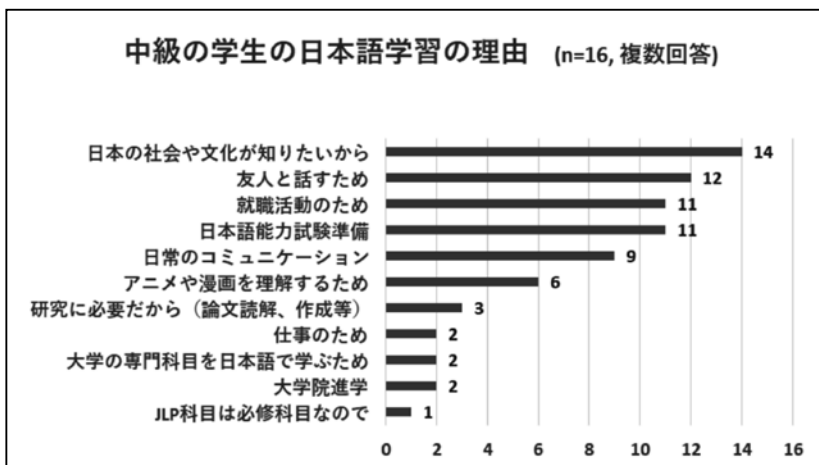


図4. 中級の学生の日本語学習の理由

中級レベルの学生が日本語を学ぶ理由としては、初級と同じような、日本の社会や文化への関心、日常的なコミュニケーションの必要性、といったことに加えて、就職活動のため、日本語能力試験準備といった項目も挙がってくる（図4）。

実際、このレベルの授業で扱うのは、毎日の日常会話ではなく、一般的な話題についての

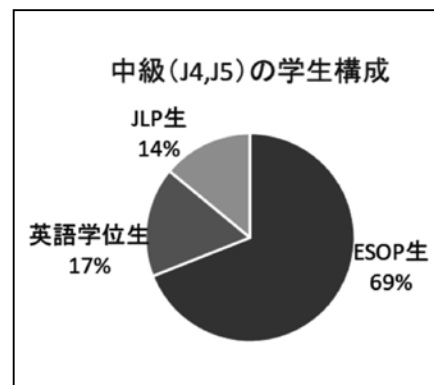


図5. 中級の学生構成

読み書きが中心になる。そのため、初級るとき以上に漢字の習得が不可欠で、これは非漢字圏の学生にとって多大な努力を要する。また、初級までと違い、新しい文型や語彙を学んでもそれを全てそのまま日常会話で使えるわけではなく、かといって日常的に目にする日本人向けの文章を読むのはまだ難しいので、上達を実感しにくい。非漢字圏の学習者の場合、初級までは

順調に学習が進み、コミュニケーションがどんどんスムーズになる実感を得られていたのに、中級に入って漢字の習得がうまく進まず、また上達を実感できずに挫折してしまう例も多い。学習のモチベーションを維持するのが難しいレベルだと言えよう。

2017年度、初級を終えたので次のステップに進みたいというだけの理由で中級クラスに上がってきた学生からは、「中級の（特に、メインとなる読解文法の）授業は漢字の負担が大きすぎる」、あるいは「学習した文法が日常会話で役に立たない」といった不満が目立つように見受けられた。また、受講できる授業をすべて登録して消化不良を起こす学生もいた。そこで2018年度は、学生が受講科目を決める前に丁寧なオリエンテーションを行い、中級の授業の中心になるのは日常会話ではなく読み書きであること、そのためには漢字の習得に大きな労力を費やさなければならないこと、日常会話の上達が目的であれば聴解や会話の授業だけを受講することもできること、などを詳しく説明し、本人のニーズに合わせた丁寧な履修指導を行うように心がけた。

また、多くの学生が受講する読解文法の授業では、クラスで必修とする漢字の数を絞り、さらに上のレベルを目指す学生には授業で扱わない漢字の自習を促すために教材を紹介するなどした。また、初級の漢字が十分習得できていない学生に対して、部首など漢字の仕組みを知り、初級の漢字を復習するとともに、日常生活で頻繁に目にする漢字を読めるようにするための授業を設けた（復習Ⅰ「生活漢字」）。また、自習用の漢字シートやオンラインの宿題を整備することによって漢字を自主的に学習できるようにした。

このようにきめ細かい指導をすることによって、クイズのたびにやみくもに漢字を覚えてはすぐに忘れるといったことがなくなり、クイズや試験でも安定した成績が取れ、学生間の差が小さくなったことでクラスのまとまりや一

体感も感じられるようになった。

今後は、さらに丁寧な履修指導により学生のニーズを把握し、それぞれの学生に合わせた指導を工夫していきたい。また、ここでは技能別の科目については触れられなかったが、たとえば会話クラスでは、初級・上級レベルとともにこれまでの教科書の内容を見直し、全レベルを通して話題・機能（依頼・許可求めなど）・丁寧さのレベルなどが包括的にかつ順序よく学習できるように教科書や扱う課を調整した。今後さらに、同レベルの科目間の連携や上下のレベルとの連携を強化していきたい。

### 5-3. 中上級の教育

#### (1) 学習目標と対象者

J6レベルの目標としては、「話す」技能については、幅広い話題に関して、ある程度のまとまりのある長さで具体的に、詳しく説明したり、自分の意見を論理的に表現したりできるようになること、場面に応じて、会話の相手との関係を考慮しながら敬語等の待遇表現を適切に用いてコミュニケーションができるようになることである。「聞く」技能については、幅広い場面において自然に近いスピードのまとまりのある会話、ニュース、ドラマ、ドキュメンタリーなどを聞いて、内容、要点が、理解できるようになることである。「読む」技能については、幅広い話題について書かれた論旨が明快な文章を読んで内容を理解し、また、要約できるようになることである。「書く」技能については、幅広い話題に関して複数の段落を用いて内容に一貫性があり、論理的な文章が書けるようになることである。

対象となる学生のレベルとしては中級後半から上級の学生で、800時間以上の学習歴がある学生である。修了時の目標レベルとしては日本語能力試験のN1、CEFRのB2であり、漢字は1200字以上、語彙数は8000以上、多様なトピックに対応できる語彙力を身につけることが目標となる。

このレベルの特徴としては、その扱う内容が日常や一般的なものから、幅広い分野に広がり、J7レベルのアカデミックなものやビジネスに関わるようなものに近づいていくということである。

(2) 科目構成

J6は8科目あり、科目内訳は、集中Ⅰ・Ⅱ、集中Ⅲ、集中Ⅳ・Ⅴ、読解文法Ⅰ・Ⅱ、聴解・

漢字・語彙である(表3)。このうち、集中Ⅰ～Ⅴでは、科目名の通り、それぞれ文法(集中Ⅰ・Ⅱ)、会話(同Ⅲ)、読解(同Ⅳ・Ⅴ)を中心に集中的な学習が行われ、比較的宿題や小テスト等の課題も多く、進度も早い。読解文法のクラスでは、課題文の読解後に読解文のテーマについてクラスで意見を交わす話し合いも行われる。

表3. 中上級の科目構成

主な学習内容	科目名
文法	集中Ⅰ・Ⅱ
会話、聴解	集中Ⅲ、聴解・語彙・漢字
読解	集中Ⅳ・Ⅴ、読解文法Ⅰ・Ⅱ

(3) 中上級レベルの学生のニーズに対応した教育実践の分析

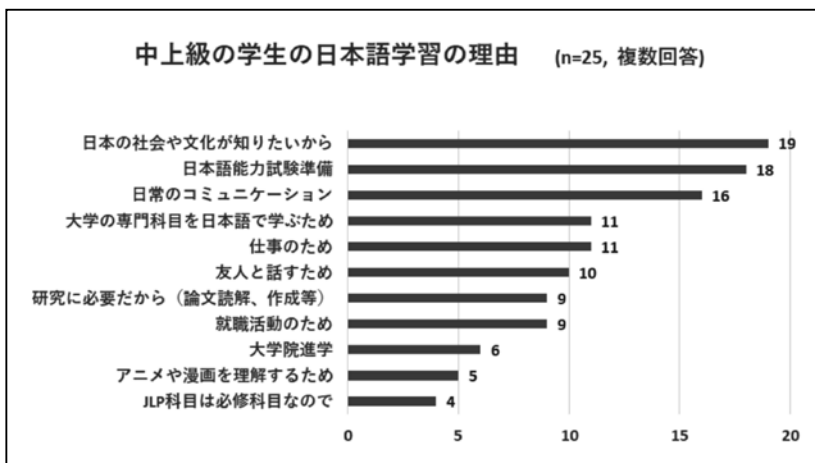


図6. 中上級の学生の日本語学習の理由

このレベルの学生のニーズは、他のレベルの学生のニーズと同様に、日本の社会や文化について学ぶことがトップに来ているが、他のレベルとの違いは、日本語能力試験の準備が2位に来ていることにあり、これはJ6レベルでは、JLPTのN1を目標とする学生が多いことを反映している(図6)。

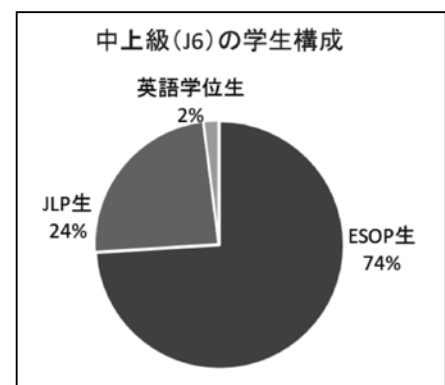


図7. 中上級の学生構成

J6レベルの学生の構成としては、ESOP生(交換留学生)が多くを占めており、次いでJLP生となっている(図7)。ESOPの学生は、ESOPが提供する科目、そしてJLPの科目の両方を履修する学生もいるため、彼らが日本語学習に充てられる時間、またはモチベーションを考慮しながら教育を展開していく必要がある。

課題として挙げられるのは、まず学生の語彙力の養成についてである。中上級レベルの学生の多くは、新しい文法事項を習得する力、および読解力は高いものの、文法や読解の学習、およびアカデミック日本語などでの文章作成の際の語彙力が低い傾向にある。そのため、新しい文法を習得しても、それを用いて文を作成させると、その文で使われる語彙が文法レベルに適していなかったり、読解においても語彙がわからないために内容の把握ができないといったことが見られ、語彙力をどのように増強させていくかということが課題である。

また、語彙と同様に課題となるのが漢字である。学生に手書きで提出させる課題などを見ると、非漢字圏の学生を中心に、初級レベルの漢字の書き誤りや、ほぼ全て平仮名で提出してくるといったものも見られる。初級レベルのように一つ一つの漢字を一画ずつ教えるということは中上級では通常行われませんが、大量の語彙とともに提出される漢字についてもどのように習得させていくかが課題となる。

それに加えて、学生のコミュニケーション力に対する自信のなさ（自己評価の低さ）に対する指導の工夫も必要となる。学生はこのレベルに至るまでにすでに初級、中級の学習を終えており、日常のコミュニケーションにおいては支障がないレベルに到達しているはずであり、また実際にそうであるが、彼らはまだ十分ではないと感じている。これについては、これまでの学習が文法の習得、読解を中心に行われ、話す練習をあまりしてこなかったのではないかとということが理由として考えられる。しかし、中上級の会話の科目となると、その主眼は日常のコミュニケーションというよりも、長めの独話やビジネスの日本語、アカデミックの発表などに充てられる。この両者の乖離をどのように埋めていくかも今後の課題である。J6のレベルでは、会話を主に扱う科目が集中Ⅲのみとなっているため、読解文法の科目で、本文読解後、その内容についてディスカッションをする時間

を設けて、発話機会をできるだけ作るようにしている。

今後の方向性としては、上級レベルの学習がより専門性を増してくる中で、上記のような学生の構成および性質、学習目的を考慮しながら、学生の語彙力・漢字力を増強させ、また学生のニーズにも応えていく方法を考えていくことである。

#### 5-4. 上級の教育

##### (1) 上級の学習目標と対象者

J7レベルは JLPT N1 レベル相当の学生（日本での勉学や生活に必要な基礎的な日本語の勉強は終わっている学生）を対象とし、ビジネス、日本社会文化、アカデミック日本語の3つの分野を通じて総合的なコミュニケーション力を高め、日本社会や文化に関する知識を深めることを目的とする（表4）。学生は留学の目的、自分の興味に合わせた科目を履修することができる。このレベルの学生は、学部の科目を履修する日本語力を有するため、学部科目と並行して履修する学生も多い。

##### (2) 上級の科目構成

J7の科目構成は以下の通り。

A) のアカデミック日本語科目ではレポート作成に重点を置き、学部生用（アカデミック1～3）、大学院生用の科目（アカデミック4と5）を提供する。アカデミック日本語1では基礎力と簡単な留学体験レポートの作成（4000字程度）、アカデミック日本語2では論証型のレポートの作成（4000字程度）、アカデミック3では大学、大学院進学を目指す学生の志望理由書と研究計画の指導を行う。そして2019年度からは大学院生のための論文作成基礎科目としてアカデミック4、5も設置予定である。

B) のビジネス日本語科目ではビジネス日本語1と2で敬語の基礎と運用力を身につけることを目標とする。ビジネス日本語3では具体的な就職活動の準備、そして社会参加活動（ポ

表4. J7レベルの科目

目的別カテゴリー	科目名
A) 大学、大学院での勉学・研究に必要な日本語	・アカデミック日本語1～3（学部生対象） ・アカデミック日本語4～5（大学院生対象, 2019年度～）
B) 将来の就職活動に役立つ日本語	・ビジネス日本語1（敬語1） ・ビジネス日本語2（敬語2） ・ビジネス日本語3（就職準備）
C) ブリッジング科目	・日本社会とメディア ・日本社会と文化 ・日本の近現代史 ・日本の政治経済 ・フィールドワーク・課題研究

ランティア、インターンシップ) の振り返りを行う。

C) のブリッジング科目では、日本社会文化のコンテンツ学習を重視しており、「日本社会と文化」、「日本社会とメディア」、「日本の近現代史」、「日本の政治経済」を履修することにより、学生は日本社会の諸側面を学び、討論することができるようになる。これらの科目の多くは学部のボランティア学生も参加するため、多文化協働学習の場ともなっている。また、社会文化の研究調査を行う学生のために質的調査の技法を学ぶフィールドワーク・課題研究の科目を設置しており、卒業論文のための調査、大学院での研究活動の準備として履修することもできる。

J7 レベルの学生の構成は、図9が示す通り、交換留学生、私費留学生の順で多く、どちらのグループも日本語日本文化専攻の学生が多い。このため図8のアンケート結果が示す通り、学生の興味は、1) 日本社会や文化に対する興味(84%)、2) コミュニケーション力向上(76%)という2つの項目が上位を占めており、次いで3) 研究のために(44%)、4) 専門科目を日本語で学ぶため(40%)、5) アカデミック日本語のニーズ、就職活動のため(各32%)などとなっている。このような学生の多様なニーズに対応して、J7 レベルではさまざまな科目を提供しているが、まだ十分に対応できていない部分もあり、今後の取り組み、指導上の留意点を以下に挙げたい。

(3) 上級の学生のニーズに対応した教育実践の分析

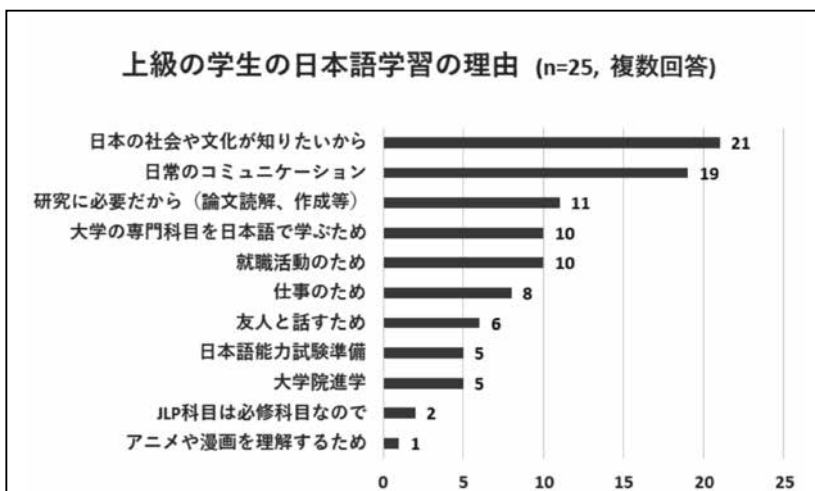


図8. 上級の学生の日本語学習の理由

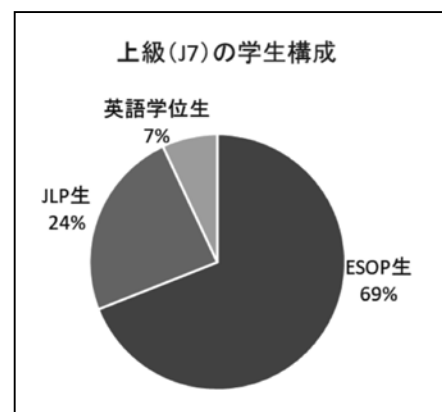


図9. 上級の学生構成

第一にアンケートにおいて最もニーズのあった「日本社会や文化に対する興味」に対応するために、社会文化のブリッジング科目、フィールドワーク科目を提供しており、学生のニーズに基本的には対応できているのではないかと考える。しかし、教育の課題として、J7レベルの学生はブリッジング科目と並行して学部の専門科目を履修できる段階にきているが、学部の専門科目を履修する際に最初は戸惑いを感じる学生が多いことが挙げられ、そのための学習支援をより充実していくことが必要になっている。JLPで学んでいる多くの学生は大学での専門が日本語であるため、日本語以外の学部の専門科目を履修する際に講義を理解するために必要な背景知識が不足しており、学部教員の話すスピードに慣れるのにも時間がかかるため、講義理解に何らかの困難を感じる人が多い(特に学期の最初の1、2か月間)。また、クラスでの授業内リアクションペーパー、クラス内テストなど時間制限のある課題は日本語で書くスピードが遅い留学生にとっては負担が大きく、学期末のレポートに対する不安も聞かれる。このため、J7のブリッジング科目では、学生の日本語力を配慮しつつ、背景知識の補足説明を入れながら、社会、文化、歴史、政治経済、メディアのコンテンツ科目を教えており、学部科目の履修で必要とされるリアクションペーパー作成、記述試験、レポート課題なども取り入れ、学生たちが無理なく学部の専門科目履修ができるような橋渡し(ブリッジング)に努めているが、ブリッジング科目の教え方に関しては教員間でまだ十分な意思統一がなされておらず、今後さらに担当教員間で検討し、充実させていく必要がある。また、学部の専門科目と連携した授業開発なども検討していきたい。

次にアンケートの2位の「コミュニケーション能力向上」のニーズに関しては、J7のブリッジング科目(日本社会とメディア、日本社会と文化、フィールドワーク)、ビジネス日本語科目を中心に、日本社会や文化のさまざまなテー

マについて話し合う機会を設けている。しかし、課題としては、クラスの履修者数が多くなると、学生の発話やディスカッションに対して教員がフィードバックすることが難しいことが挙げられる。このため、ボランティアに授業に入ってもらい、彼らとの交流を通じてコミュニケーション力を高めると同時に、同世代の若者の視点を学んだり、教室外での交流を深める機会として活用してもらえればと考えている。本学では日本語教育専攻の学科はないが、全学の60名以上の学生が毎学期日本語ボランティアとしてJLPのクラスに参加してくれており、こうした機会に留学生が日本語で交流し、言語文化的に多様な学生(留学生、日本の学生)と共に学ぶことで、コミュニケーション力を磨いてほしいと考えている。また、授業ではペアワーク、グループワーク、少人数のポスター発表のセッション、クラス全体に対する調査研究発表などさまざまな形式での自分の意見の発信とディスカッションの機会を設け、できるかぎり学生たちのコミュニケーションを促すように工夫している。今後、学生のコミュニケーション力を高める活動をさらに増やしていきたい。

これに加えて、アンケートでニーズの高かった「大学院進学」、「就職準備」に関しては、ビジネス日本語科目、アカデミック日本語科目を提供し、それぞれのニーズに対応した教育を行っており、ある程度学生のニーズに対する対応はできているものと考えている。しかし、履修希望者数が年々増加しており、クラスの受け入れ可能な人数にも限りがあることから、今後さらなる教育体制の拡充が必要となってくるだろう。ビジネス日本語は、前述したとおり、一般的な敬語会話を練習したい場合は「ビジネス日本語1、2」、具体的な就職活動やインターンシップのための日本語を学びたい学生には「ビジネス日本語3」というように、きめ細かくニーズに対応した履修指導をしている。また「アカデミック日本語1～3」に関しても学生の学部科目や大学院科目のレポートに対応した指導をす



るとともに、大学、大学院進学希望者には志望理由書、研究計画書の作成の支援を行っている。これらの科目は、日本語教育にとどまらず、キャリア支援にもつながるもので、日本語教育だけでなく、進学指導、キャリアカウンセリングの経験を持った教員が担当しているが、今後、ますますこれらの科目のニーズは高まると予想される。よって、JLPの教員間で指導方法の情報共有や研修を行うことで、教員全体の指導力を高めていきたい。

## 6. 今後の展望：全学で統一した日本語教育の重要性

本稿では高等教育のグローバル化、留学生政策と連動した大学の留学生の受け入れルートの拡大と多様化の流れを俯瞰し、本学の新しい日本語教育プログラムがそうした多様化に対応してどのような教育を行っているのかを分析した。こうしたマクロとミクロの視点からの分析は日本語教育の研究では非常に少なく、本稿は新しい知見を提供できたのではないかと考える。

本学のJLPプログラムは、政府からのグローバル化のための競争的資金に本学が採択されたことが大きな契機となってできたものであり、その意味では本稿は、グローバル化を推進する教育政策が大学の言語教育プログラム、留学生支援にどのようなインパクトを与えたのかを具体的に知る上での貴重なリソースになるであろう。

同時に、JLPプログラムは、そうした競争的資金によるインセンティブをきっかけとしつつも、本学が多様な留学生を受け入れ、大学のすべての学生が学び合う環境を実現するためには何が必要なのか、という課題に向き合い、作り上げたプログラムでもある。本稿の実践分析は、多様性に対応した日本語教育が単に留学生の「日本化」を目指すのではなく、初級から上級までの留学生の多様な言語レベルやニーズに対応した教育を提供していることを明らかにし、

多様な言語文化的な背景を持った学生達が自律的に学び、主体的に大学コミュニティーや社会に参加していくための学習支援として何が必要なのかを踏まえた日本語教育の新しい役割、意義、そして今後の課題を明らかにした。これにより、教育のグローバル化、留学生の多様化に対する大学の責任ある取り組みの一端を示すことができたのではないだろうか。

よって、本稿は大学関係者（学部教員、大学院の教員）が留学生の多様化に対応した受け入れ体制や教育を考える際に役立つと同時に、高等教育のグローバル化に対応した日本語教育の実践分析として新しい知見を提供できたものとする。

最後に本学における日本語教育の今後の展望について考えたい。JLPは多様な受け入れルートを介して来日する留学生の「多様性」に対応して作られたプログラムであるが、本プログラムは現在のところ、学部の留学生を対象とした日本語教育とはほとんど連携していない。図10の「連携」に関しては今後の課題である。上級（J7）の教育で述べた通り、JLPの最上級のレベルの学生は学部の留学生とほぼ同じレベルの日本語力を持っており、アカデミック日本語は、学部の日本語教育と共通する部分も多く、教育リソースの共有化、教員の教育実践の一貫性を担保するような連携が取られることが、大学全体の留学生支援の体制をより充実させるために望ましいと考える（図10の上部の連携部分参照）。

また学部の日本語教育では留学生のキャリア支援としてのビジネス日本語教育は十分に提供されていないが、JLPではビジネス日本語3科目が提供されており、履修者は年々増加していることから、留学生のビジネス日本語教育へのニーズは高いと言える。今後政府の外国人労働者受け入れが拡大する方向にあり、ビジネス日本語科目へのニーズが全学的にさらに高くなることが予想される。このため、ビジネス日本語教育の分野においても学部とJLPで教員間

の連携、教育方法の情報共有、教材の共同開発などが進められていくことが全学としての留学生の学習支援の在り方として望ましいであろう。さらに、2019年度より大学院の学生のためのア

カデミック日本語科目が新設され、大学院との連携も始められるが、大学院レベルでのアカデミック日本語教育に関しても今後、全学の日本語教育科目の一貫性のある発展が望まれる。

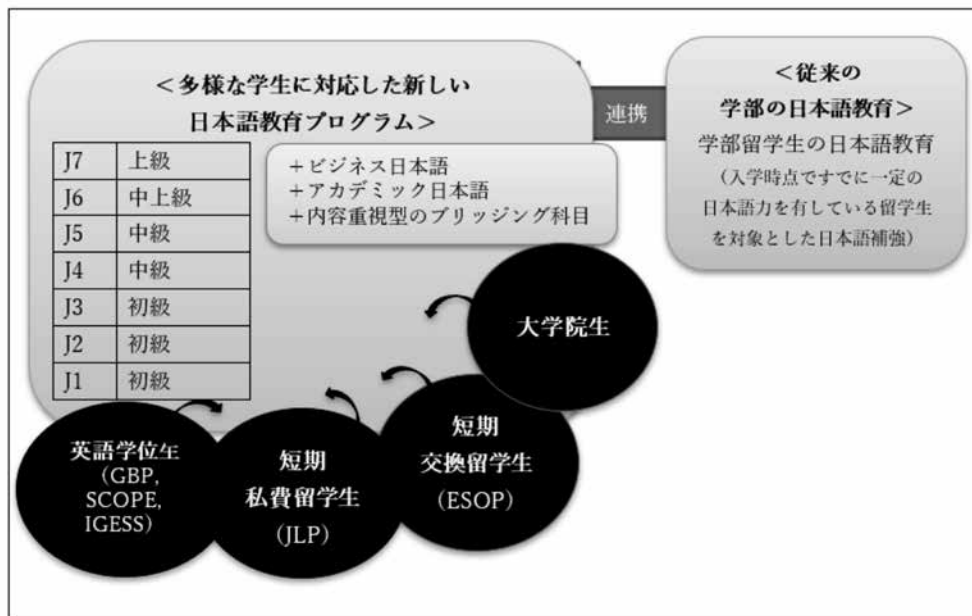


図10. JLPと学部日本語教育の連携

参考文献

Brown, P., & Tannock, S. (2009) . Education, meritocracy and the global war for talent, *Journal of Education Policy*, 24 (4) : 377-392.

OECD (2010) *Off to a good start? Jobs for Youth*, <http://www.oecd.org/els/offtoagoodstartjobsforyouth.htm>, (2018年9月20日アクセス)

神吉宇一 (2017) 「留学生・高度人材に対する政策の変遷とビジネス日本語教育」田尻英三編『外国人労働者受け入れと日本語教育』ひつじ書房, pp.157-182.

グローバル人材育成推進会議 (2012) 「グローバル人材育成戦略 (グローバル人材育成推進会議 審議まとめ)」  
<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/1206011matome.pdf> (2018年9月20日アクセス)

新日本有限責任監査法人 (2015) 「平成26年度産業経済研究委託事業 (外国人留学生の就職及び定着状況に関する調査) (http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/global/pdf/H26\_ryugakusei\_report.pdf (2018年9月20日アクセス)

恒吉僚子 (2016) 「教育における「グローバル人材」という問い」佐藤学・秋田喜代美・志水宏吉・小玉重夫・北村友人編『岩波講座教育変革への展望7グローバル時代の市民形成』岩波書店, pp.23-44.

文部科学省 (2002) 「当初の「留学生受入れ10万人計画」の概要」、留学生交流関係施策の現状等について (資料編) [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/007/gijiroku/030101/2-1.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/007/gijiroku/030101/2-1.htm) (2018年8月10日アクセス)

文部科学省 (2008) 「『留学生30万人計画』の骨子」とりまとめた考え方 [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/attach/1249711.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/attach/1249711.htm) (2018年8月10日アクセス)

溝上慎一・松下佳代 (2014) 『高校・大学から仕事へのトランジション—変容する能力・アイデンティティと教育』ナカニシヤ出版

村田晶子 (2011) 「言語サポートに向けた留学生の日英言語使用実態の分析」『東京大学大学院工学系研究科国際交流室年報』17-22

村田晶子 (2018) 『大学における多文化体験学習への挑戦：国内と海外を結ぶ体験的学びの可視化を支援する』ナカニシヤ出版



資料：JLP各レベルの目安

レベル	修了時の目標	CEFR	入学時の学習時間(目安)	目標漢字数	目標語彙数	具体的な目標
J1	初級	A1.1	開始時 0-30時間 程度	・ひらがな ・カタカナ 漢字 50		【話す】 日常生活の限られた場面で非常にゆっくりと話される簡単な会話を理解し、単語、定型表現、あるいは短文を使って何とか話すことが出来る。 【聞く】 日常生活の限られた場面で非常にゆっくりと話される簡単な会話の内容が何とか理解できる。 【読む】 日常生活の限られたトピックについて仮名、初歩的な漢字を使って簡単な短い文が書ける。 【話す】 日常生活の限られた場面の会話の理解し、短い文を使って話すことができる。 【聞く】 非常に簡単な場面にはあるが、自分の意見や希望を伝えたり、身近な話題に關しての説明ができる。 【読む】 日常生活の限られたトピックについて仮名、漢字を使って書かれた短い文章を読んで理解できる。 【書く】 日常生活の限られた基礎的な語彙や漢字を使って短い文で身近な話題について書ける。 【話す】 日常生活の中で必要となる基礎的な会話を理解したり、簡単な文をつなげて話すことができる。自分の意見や希望を伝えたり、身近な話題に關しての説明をすることが出来る。 【聞く】 日常生活の場面で、ゆっくりと話される簡単な会話の内容を理解し、対応することが出来る。 【読む】 日常生活で用いられる基本的な語彙や漢字を使って書かれた短い文章を読んで理解できる。 【書く】 日常生活で用いられる基本的な語彙や漢字を使って短文をつなげ身近な話題についての説明文、簡単な感想や意見が書ける。
J2	目標 N5	A1.2	開始時 50-100時間 程度	100 漢字	目標 800 語	【話す】 日常生活の場面で、ややゆっくりと話される簡単な会話を理解し、短文をつなげ身近な話題についての説明文、簡単な感想や意見が書ける。 【聞く】 日常生活の場面で、ややゆっくりと話される簡単な会話の内容を理解し、対応することが出来る。 【読む】 日常生活で用いられる基本的な語彙や漢字を使って書かれた短い文章を読んで理解できる。 【書く】 日常生活で用いられる基本的な語彙や漢字を使って短文をつなげ身近な話題についての説明文、簡単な感想や意見が書ける。
J3	目標 N4	A2	開始時 250時間 程度	300 漢字	目標 1500 語	【話す】 日常生活の場面で、身近な話題に關しての説明をすることが出来る。 【聞く】 日常生活の場面で、身近な話題に關しての説明をすることが出来る。 【読む】 日常生活の場面で、身近な話題に關しての説明をすることが出来る。 【書く】 日常生活の場面で、身近な話題に關しての説明をすることが出来る。
J4	目標 N3	B1.1	開始時 400時間 程度	600 漢字	目標 3000 語	【話す】 日常生活の場面で、身近な話題に關しての説明をすることが出来る。 【聞く】 日常生活の場面で、身近な話題に關しての説明をすることが出来る。 【読む】 日常生活の場面で、身近な話題に關しての説明をすることが出来る。 【書く】 日常生活の場面で、身近な話題に關しての説明をすることが出来る。
J5	目標 N2	B1.2	開始時 600時間 程度	1000 漢字	目標 6000 語	【話す】 日常生活の場面で、身近な話題に關しての説明をすることが出来る。 【聞く】 日常生活の場面で、身近な話題に關しての説明をすることが出来る。 【読む】 日常生活の場面で、身近な話題に關しての説明をすることが出来る。 【書く】 日常生活の場面で、身近な話題に關しての説明をすることが出来る。
J6	目標 N1	B2	開始時 800時間 以上	漢字 1200plus	8000plus 各種なトピックに 対応できる 読解力	【話す】 日常生活の場面で、身近な話題に關しての説明をすることが出来る。 【聞く】 日常生活の場面で、身近な話題に關しての説明をすることが出来る。 【読む】 日常生活の場面で、身近な話題に關しての説明をすることが出来る。 【書く】 日常生活の場面で、身近な話題に關しての説明をすることが出来る。
J7	大学・大学院 の修士・研究 科の修士課程 に向けた準備	C1				【話す】 日常生活の場面で、身近な話題に關しての説明をすることが出来る。 【聞く】 日常生活の場面で、身近な話題に關しての説明をすることが出来る。 【読む】 日常生活の場面で、身近な話題に關しての説明をすることが出来る。 【書く】 日常生活の場面で、身近な話題に關しての説明をすることが出来る。